

を察知するに難からざると共に、唐が其の拒む能はざる回鶻の請を容れしに止まらず、之によりて好みを深くし、新たに援助を得て、當時河北に蟠居せし賊黨を討たんとせしものなることを推すに難からず、果せる哉磨延賚は寧國公主に尙し、英武威遠毗伽可汗の冊を受くるや、翌八月には早くも其の子骨賚特勤及び宰相帝得等をして三千人を率ゐて入援し、賊を討たしむるに至れり<sup>〔七九〕</sup>、此の後磨延賚の唐に對する態度は翌年四月死没の時に至る迄變化無かりしが如く<sup>〔八〇〕</sup>、或は大首領蓋將軍等を遣し、或は三婦人を遣して婚を謝せしめ、而して其の軍は郭子儀に従ひて、唐の爲に戰に従事したりしこと記さる<sup>〔八一〕</sup>。

之を要するに磨延賚は唐の國勢累卵の如き時に當り、巧に其の武力を利用して、一面には唐を援け、他面には之を牽制し、遂に其の公主を迎へ、不拔の勢力を唐に扶植するに至りしが、然も其の一代の間未だ曾て唐を侵すには至らず、親善の關係を持続したるものなりとす、此の間注意すべきことは、回鶻が唐に對する數次の援助に當り、磨延賚は其の子若しくは部下の將士をして之に従事せしめ、自ら軍を率ゐて南するに至らざりしことなりとす、もとより至徳元年七月以後に於る可汗の在世は僅かに三年に満たざれども、然も此の間かゝる態度を持続せしものは、或は北方に事ありて、未だ自ら南方に向ふを許さざる事情の存したるには非るべきか、唐代の記録は此の如き事情に就きては殆ど何等記載する所無けれども、唯舊唐書廻紇傳に「乾元元年（七五八年、戊戌）九月甲申廻紇使大首領蓋將〔軍〕等、謝公主下降、兼奏破堅昆五萬人」と曰ひ、新唐書回鶻傳にも「又遣大首領蓋將軍、與三女子謝昏、并告破堅昆功」とし、同書黠戛斯傳にも「乾元中爲回紇所破、自是不能通中國」と見え、別に又葛邏祿との關係に就きては、新唐書葛邏祿傳に「至徳後葛邏祿寢盛、與回紇爭疆、徙十姓可汗故地、盡有碎葉・怛羅斯諸城、